

天理図書館蔵『山路の露』について

— 伝本二系統における位置付けとその意義 —

岡 陽 子

はじめに

『源氏物語』宇治十帖世界を継いで薫と浮舟のその後を描いた物語として知られる『山路の露』は、近年、西木忠一・池田良子両氏による一連の注釈や、土方洋一氏および湯川直美氏による文学史における位置付けをはかる論考、また『源氏物語』との関わりについて言及する若林薫氏による論考など、内容面についての論究が相次いで提出されてきた。これら先学の研究により、本物語の作品世界については次第にその内実が明らかにされつつあるといつてよいだろう。

しかしながら、扱つてたつべき本文については、いまだ大きな問題が残されているのも事実である。諸伝本は、物語後半に見られる約一丁分の大きな異同から大きく一類本・二類本の二系統に分類できることが本位田重美氏^⑤によつて指摘された。この二系統の分類は本稿にも大きく関わるため少し詳しく触れておくと、まず一類本は

当初本位田氏が「刊本系」と名付けられた一群で、版本、いわゆる「絵入源氏物語」の附録「山路の露」、および「統群書類従」所収本がこの系統の代表的本文であり、これらを写した本も多く残されている。また、大きな錯簡・脱落があるものの、宮内庁書陵部蔵の写本「山路の露」(桂宮本)も一類本の一つとされている。以上の一類本に対し二類本は、当初「写本系」と名付けられていたことから明らかのように、写本のみから成る一群である。早くに池田亀鑑氏^⑥が紹介された玖山九条植通筆本もその一つで、他に現在のところ七伝本が知られている。

このような二系統の伝本について、本位田氏が一類本を評価されたのに対し、二類本を評価された論考もある。また稲賀敬二氏^⑦は両系統の形成に関して新たな視点を提示された。このように『山路の露』の伝本に関しては様々に論じられてきたものの、いまだ決着を見ていないというのが現実であり、今後も詳細な検討が必要であろうと考える。

本稿では、『山路の露』伝本研究の一階梯として、新たに管見に入つた伝本、天理図書館蔵『山路の露』を紹介し、諸本間での位置付けと意義について考察したい。

一 書誌および分類

今回取り上げる天理大学附属天理図書館所蔵『山路の露』(以下、「天理本」とよぶ)は、『国書総目録』にも「天理(室町中期写)」と載

せられている伝本である。

はじめに書誌について記す。原本の体裁等について、『天理図書館稀書目録』より引用する。

山路の露 寫 一冊

二四一八

袋綴 雲紙表紙 用紙薄様 裏打 二六・五糶二〇・五糶

十二行 三十三丁 題簽中央紅紙書名同 内題なし、「桃園

文庫(紙票)」

(室町時代中期寫 九一三・三六一・二三九)

なお墨付32丁であり、傍書が多いことを付け加えておく。また、関係者の言によれば、丁数を示す付箋が随所に見られる由である。

さて、『山路の露』伝本は先に記したように大きく二系統に分類できるため、まずは天理本がどちらの系統に属する本であるのかが問題となる。分類の際に最も重要な指標となるのが物語後半に見られる約一丁分の異同であるから、本来その相違部分をそれぞれ示すべきだと思ふが、かなりの分量であるため、以下概略のみを記す。引用は、山内洋一郎氏が両系統を対校の形で示された『山路の露 本文と総索引』に拠る。

〈両系統共通部分〉 (二類本が主行、一類本を対校)

いゝまぎらはして打そむきたまへるかたははらめ、あひ行づき、いひ知ずをかしげなるを、いとゞ・かなしとおもへり。

〈二類本独自本文〉

「都にもたれかはしりきこえん」などいひて、尼君のかたへ「つ

きせぬことゞもを返くうれしくも有がたくもさまゞ思ひみだれ侍、いかさまにもかさねてやま路わけ侍らむおりぞ、心しづかに」などいひ入たる。(中略) 姫きみは、なごりもこひしく打ながめて、さまゞ成ける身のありさま、おぼしつゞけて、なをさめやらぬ夢のこゝちし給にも、よろづをそぎすて、おこなひをこゝろに入給て、いとゞし給。

〈一類本独自本文〉

「みやことでもなにかさのみ人めしげう侍らん。ことさら山里びてつくらせ侍べき」など、御心につくさまにきこえなすも哀なり。(中略) 道すがらみるそのあたりの山さへかすかにとをうなるまゝにいとゞ心ばそくて、かしこには又なごりかなしくて、ながめ給ふまぎらはしに、君は例のごやのをこなひに心入給べし。

〈両系統共通部分〉

うこんは其くればどに殿へまゐりたればひよりも人すくなに、しめやかにて、はしつかたにみすまきあげて、笛吹きすさびて、をはしますほどなりけり。(46頁7行、49頁3行)

両系統に大きな異同があるのは、浮舟母と右近が小野を訪れた場面である。両系統共通部分で浮舟と対話した母は、二類本では続いて小野の尼君に挨拶し、尼君たちはその心中を思い涙する。語り合った後、母と右近は下山。残された浮舟は様々に思いをめぐらせる。このような二類本に対し、一類本では、母は持参した衣類などを浮

舟と尼君たちに手渡し、尼君たちは大喜び。右近は小野に残りたく思うがかなわず、浮舟と歌を交わす。残された浮舟は物思いにふける。両系統ともに最後は勳行に専心する浮舟を描く。

このように大きな異同が見られるのであるが、天理本で当該箇所を見てみると、以下のようになっている。

〈両系統共通部分〉

いひまきはしてうちそむき給へるかたはらめいひしらすをか
しけなるをいとしくかなしとおもふ

〈両系統相違部分〉

宮とてもなにかさのみ人めしけう侍らむことさら山さとひて
なんつくらせ侍へきなど御心につくさまにきこえなすもあはれ
なり（中略）道すからもかへりみるそのあたりの山さへかすか
に遠うなるまゝにいと心ほそくてかしこには又なこりかなし
くてなかめ給ふまきはしにれいのおこないに心いれ給ふへし

〈両系統共通部分〉

うこんはそのくれほとに殿へまいりたればれいよりも人すくな
にしめやかにてはしつかたにみすまきあげてふえふきすさみつ
ゝおはしますほとなりけり

多少の異同はあるものの、一類本独自本文とほぼ同じであることがわかる。このことから、『山路の露』伝本二系統の中では天理本は一類本に属するということが確認されるのである。

次に、これまで一類本に属する写本はほとんどが版本の写しとき

れてきたが、それらとは異なつて天理本は版本の写しではない独自の写本であることを確認しておく。

まず版本には冒頭の「薰廿五才の冬までの事也」や「詞」「薰」のような形で本文に関する説明が随所に傍注によつて示されているのに対し、天理本にも傍注は多く見られるが、いずれも見せ消ちや語句の挿入であり、版本のような傍注は全く見られない。

また、a 版本の語句を天理本が欠く例、b 天理本の語句を版本が欠く例、c 両者が異なる本文を持つ例も、それぞれ多く見られる。

以下、いくつかの例を任意に挙げる。本文の引用については、上段に版本（引用本文の傍書）、下段に天理本を配する。

a 版本の語句を天理本が欠く例

- ① 我・ながらかくあやにくに思ひしられたまふ。とさまかうざ
まにおほししづむれど、なをいかなるにか、ひたすらなきに
なしつる年月は（2頁12行）—— われならあやにおもひし
られ給ふひたすらなきになしつるとし月は
② すそのそぎめ・なかくいとめでたきにも（42頁13行）——
中くいとめでたきにも

b 天理本の語句を版本が欠く例

- ③ 少将のあま道引入て、人々はおくのかたへすべりかくれぬれ
ば（9頁12行）—— 少将のあまみちひき入て人々とくすへ
りかくれぬれは
④ 世中・しづまりてみなまかまちりなどして名残なくしめやかな

るに(14頁6行)——夜中もしつまりて人々このきはきにま
いり給へるはいはすさらぬもみなまかてちりなとしてなこり
なくしめやかなるに

c 両者が異なる本文を持つ例

⑤よゝにかえても忘れがたきを、なくさめに(2頁8行)——

世々をへたてゝもなくさめかたきまゝに

⑥ほのかにまきはしたるも、いみじう・・・なつかし(22

頁2行)——ほのかにまきはしたるもいみじうなつかし

このような本文状況から、天理本は一類本に属する写本であるといえ、版本の写しではないことはもちろん、①④⑤のように複数語句にわたつて異なる部分も多々見られることから、版本の祖本とも異なる伝来による本文であることが想定されるのである。

さらに付け加えておくと、②⑥のように版本ではなく明らかに二類本と重なる本文を持つ例もあり、両系統の中間の様相を示す伝本としても注目される。

二 天理本の特徴

次に、天理本の特徴について述べておく。すでに確認したように一類本の中でも版本とは異なる個所が多々見られるのであるが、その中でも特に顕著な一例を挙げておきたい。

一類本・二類本がそれぞれ異なる独自本文を持つ個所が存し、天理本は一類本の特徴を有していることは先に見たが、その中でも次

のようにさらに独自の部分が天理本には見られるのである。まず一類本独自本文を挙げ、それに続いて天理本本文を挙げる。

(一類本独自本文)

さまゞなるきぬあやなどもたせたりけるとりいで、姫君の御れうはさらにもいはず、尼君にも所せきまで奉りたれば、又なき身によるこびさはぎて、物さびしき尼君どもなどめさめたる心ちなんしける。うこんもやがて立とまらまほしく思ひたれども

(天理本本文) (《内が独自部分》)

さまゞなるきぬあやなどもたせたりけるとりいで、姫君の御れうはさらにもいはずあま君にも所せきまでたてまつりたればまたなき身によるこびさはぎて物さひしきあま君ともなとめさめたる心ちなんしける《このたひはかりはさらすともあれかしなされとよろつの事にかゝるすちのものさはきにたえぬる^はかみ^のおきてにさはいへとにかよいにたるへし》うこんもやかてたちとまらまほしく思ひたれとも

他の一類本では、浮舟母が持参した衣類を浮舟および尼君たちに贈る描写の後、右近の心情へと筆が及ぶ。それに対し天理本では、衣類に関する描写と右近の心情描写との間に特異な一文が挿入されているのである。

ところが、この天理本の独自部分はこのままではいかにも唐突で、文意を解釈しがたい。なぜこのような部分が天理本には存するので

あろうか。その理由はいろいろと想定できよう。たとえば、本来もつと長い描写がここにはあり、それが部分的に脱落した結果天理本が、さらなる脱落を起こした結果他の二類本が、それぞれ生じた可能性もある。あるいは、本物語の中でも本来他の部分に存した個所が何らかの錯誤でこの個所に挿入されてしまったのかもしれないし、あるいはまた、全く別の物語から誤つて挿入されてしまったのかもしれない。いずれにせよ想像の域を出ないものであるが、今は現存する『山路の露』の中で一応の想定を試してみたい。

まずこの部分で気になるのは「かみのおきて」という表現である。

本物語で「かみ」と表現されるのは①髪・②紙・③神・④守(常陸守)の四つである。このうち①②は「おきて」との結びつきに無理がある。また③は「おきて」とつながりが良いように思われるが、本物語では「神」は単独で用いられることはなく、常に「かみほとけ」「ほとけかみ」の形である。また直前の「ものさはき」が衣類を得た尼君たちの様子を指すものであるなら、尼という立場を考えてもやはり「仏」と共に用いられるべきであろう。これらのことから①②③の可能性は低いといえよう。そして残る④の場合、「守」すなわち常陸守が何らかの「おきて」を定めたことは本物語内に全く見られないもの、あり得ないことではない。しかし、当該部分の前には全く常陸守についての描写は見られず、またここに登場する必然性も感じられない。そのため、「かみ」を「守」と解釈するなら他の部分にその位置を求めなければならないことになる。

では、最もふさわしい個所はどこであろうか。本物語で常陸守が登場するのは、薫の使者として訪れた右近を迎える一場面のみである。そしてその直後、守が立ち去ったのを確認した右近が母に浮舟の生存を知らせると、母はかなりの同様を見せる。

「こはいかなることにか」とたふれふしければ、思ひつること、悲しくて、「かくおぼしめしまどはむ程は、人もあまた聞て、あしくなりなむ。』さりげなく思ひしづめさせたまへ」ときこえさすべくのたまはせつれば、にはかにまいり・つる」など、さまざまこしらへ・て、とばかりこころまどひをしづめてをきあがりつゝ、さてもこれは夢かうつゝかなにぞと、あきれまどへるさま、いと事はり也。(34頁1行)

母の動揺は「おぼしめしまどはむ程」「こころまどひ」と表現されており、「ものさはき」とも言い換えるものであろう。またこの直後には、すぐに浮舟を訪れようとする母に対し、右近が「ちかき程にも侍らす・いづくとなくて・はひかくれさせたまひ候は、守もさだめて尋きこえたまはむずらん」(34頁12行)と常陸守を気にかけている描写も見られる。

この浮舟母の動揺が見られる、先の引用個所の直後こそが天理本独自部分に最もふさわしいといえないだろうか。本来の個所から転写の過程で誤つて落とされて小さな付箋か何かで書き添えられ、さらに付箋が剥がれた結果、誤つて現在の天理本の個所に挿入されることになった、というような事情を想定するのである。とはいえ、

「あれかしな」という語法や、「ものさはきにたえぬるは」という部分も「…たえぬは」であつてほしいことなど、不自然な感が否めず、さまざま問題は残る。引き続き検討を行いたい。

おわりに

以上、天理図書館蔵『山路の露』について、甚だ簡略ではあるがその本文の様相を述べてきた。これまで『山路の露』の二類本については版本の写し以外の写本は書陵部蔵の一本のみであるとされてきたが、実はこの天理本も一類本に属する写本であることが確認できた。一類本は、書陵部本が錯簡・脱落を有しており、版本以前、すなわち江戸時代初期を遡る善本がないことが問題とされてきたのであるが、この天理本によつて、一類本内部の問題はもちろん、二系統成立の問題についても、新たに解明される点が少なくないと思われる。天理本そのものは見せ消し等の傍書が多いため注釈研究の底本として使用することは困難であると言わざるをえないが、『山路の露』諸本の成立と伝流を知る上で欠かすことのできない一本であることは間違いない。本稿が今後の『山路の露』研究に少しでも参考となれば、幸いである。

〔注〕

(1) 西木忠一・池田良子氏「山路の露注釈」(一)(『大阪樟蔭女子大学論集』第31号(平6・3))以下、現在(九)まで継続中。

(2) 土方洋一氏「『山路の露』と物語史」(年刊『日本の文学』第3集(平6 有精堂))。

(3) 湯川直美氏「『山路の露』の文学史的位置について」(『語文研究』第89号(平12・6))。

(4) 若林薫氏「『源氏物語』から『山路の露』への階梯——女君の道心と恩愛——」(『国文論叢』第30号(平13・3))。

(5) 本位田重美氏「源氏物語『山路の露』」(昭45 笠間書院)。

(6) 池田亀鑑氏「古本山路の露」(日本古典全書『源氏物語』七(昭30 朝日新聞社)所収)。

(7) なお諸本について両系統の簡易校本が山岸徳平・今井源衛氏『山路の露・雲隠六帖』(昭45 新典社)に示されている。

(8) 福田百合子氏「『山路の露』——翻刻と考察——」(『山口女子大学研究報告』第2号(昭51))、山内洋一郎氏「『山路の露』本文と総索引」(平8 笠間書院)。

(9) 稲賀敬二氏「『山路の露』の二系統と共通祖形の性格——《本文と場面》「分割」統合」機能》(『宇津保』「絵詞」)《関連の問題——》(『王朝細流抄』第5集(平12・12))。

(10) 山内洋一郎氏、注(8) 掲出書。

〔付記〕ご蔵書の撮影を許可され、紙焼写真を提供して下さいました天理大学附属天理図書館に、記して厚く御礼申し上げます。

——おか・ようこ、広島大学大学院博士課程前期在学——